吉行淳之介「原色の街」と軍国主義

――同人誌「世代」と、竹山道雄のナチス批判からの影響――

春木眞巳

吉行淳之介の最初の芥川賞候補作「原色の街」（『世代』14号、一九五一年十二月）は、当時吉行が属していた同人誌「世代」の合評会で酷評されたという。吉行は次のように回想している。

ところで、ようやく活字になった「原色の街」だったが、同人の合評会の評判はさんざんであった。（略）私が発言を求めると、女性の同人が、「こんな程度のものだったら、何某のほうがよっぽどうまいわ」と言った。何某とは、当時の流行風俗作家の名である。私の小説から風俗だけを読み取ろうとしたのか、と私は唖然として、論外だとおもった。（略）

帰途、一人で夜道を歩きながら、

「もう小説は書くまい」

とおもった。このときも、作品にたいする自信がなくなったわけではなかったが、あまりの理解のされなさに、失望落胆していた。[1]

このとき吉行は「原色の街」で「風俗だけ」ではない何かを描いたと自負していたらしい。吉行が期待した「原色の街」の「理解」とはどのようなものだったのだろうか。

まず吉行の作品についての次のような「理解」をみておこう。

文壇的処女作「薔薇販売人」（『真実』昭25・1）以来、吉行淳之介は一貫して人間存在を〈性〉の角度から追求してきたが、その原点は戦時下の体験にあったと言える。[2]

ここでは「風俗」以外の何かが「人間存在」の「追求」という言葉で示されているが、このように吉行は「性」を追求した作家と「理解」され、そしてその「性」の追求の「原点」は「戦時下の体験」にあるとされてきた。

しかし敗戦後まもない時期に戦争体験と無関係に創作活動を行い

得た作家などほとんど皆無だったのではないだろうか。吉行の作品の原点が「戦時下の体験」にあるのだとすれば、問題はそれがなぜ「〈性〉の角度から追求」されるようになったのかという点にこそあるはずだ。吉行自身は自らが「性」を描く理由を「資質」といった抽象的な言葉でしか説明していないが[3]、本稿はこの吉行の創作全体に関わる問題に対する考察の第一歩である。本稿で考察する「原色の街」は娼婦を描いた最初の作品であり、「性」を中心的題材として取り上げた最初の作品ともいえる。その「原色の街」に吉行が期待した「理解」を、当時吉行が属していた同人誌「世代」を参照することで明らかにし、吉行が「性」にどのような意味を付与しようとしていたのか考察する。

一般的に吉行は社会的、政治的なものから遠いところにいる作家と見なされている。しかし「原色の街」での吉行はそれとは少々異なり、軍国主義と個人の関係―いわゆる社会性を持った主題を「性」という題材を通して描こうとしていた。

（1）「世代」と吉行淳之介
―「反軍国主義・反ファシズム」の共有―

「原色の街」を書いた一九五〇年頃、娯楽雑誌編集者として多忙な日々を過ごしていた吉行にとって、同人誌「世代」（一九四六年七月～一九五三年二月、全十七冊）は「文学」を語る数少ない場だった[4]。同人誌「世代」は小説家吉行淳之介が形成されていく背景の一つとして確実にあった。

吉行と「世代」の思想的な関係を簡単にまとめておこう。

日高普は「同人は、ぼくもふくめてほとんどが左翼だった[5]」と回想している。しかし日高は吉行が同人の左翼的傾向からは一定の距離をとっていたと述べ、いいだももは吉行を「世代最右翼であった[6]」と位置づけている。左翼的傾向の強かった「世代」同人の中で吉行は異質な存在と思われていた。

しかし、いいだは思想的な差異を越えて「反軍国主義・反ファシズムの「最小限綱領」がそこにはあった[7]」ことを強調している。それはおそらく敗戦直後の青年にとっては極めて当然のことだったのだろうが、確かに吉行は反軍国主義の姿勢を同人と共有していた。戦争を嫌悪する自らの「生理」について吉行は、敗戦から十年ほどしてから次のように述べている。

> あの時代ほど友人になれる相手かどうかの判別が明瞭だったことはない。二言、三言話し合えば、すぐに分類がついたのである。そして、青少年を軍国主義に統一しようとした当時の権力のやり口が、どうしようもない程の愚劣さを含んでいたことが、私たちの生理を原型のままに維持させて行った。（戦後発表さ

れたナチのやり口は、最新の科学を剛に柔に応用して生理に変化を与え、精神を変形させようとしたもので、そういうやり口で攻められていたらどうなっていたか、私には自信がない。[8])

戦時中、反軍国主義の姿勢をとり続けることが出来た理由を吉行は、「最新の科学」を応用して「生理に変化を与え、精神を変形させようと」するような巧妙なやり口のナチスドイツに比して、日本の軍国主義のそれが「愚劣」であったからだ、としている。日本の軍国主義のやり口を「愚劣」と批判するのは吉行自身の体験に依拠しているとして、それと対置される「戦後発表されたナチのやり口」を吉行はどこで見聞きしたのだろうか。

結論から先に述べると、吉行は「世代」での同人活動を通じてナチスドイツに対する認識を得ていたらしい。後年の随筆風の小説「煙突男」[9]からそのことが分かる。

ヒトラーおよびナチスのやり口に麻田が脅威を覚えたのは、竹山道雄氏の『ワイマール共和国の悲劇』という文章を、もう戦争が片づいた昭和二十二年に読んでからである。

ワイマール共和国における「ドイツ・デモクラシーの崩壊過程を述べる」と著者が解説する「ワイマール共和国の悲劇」は「世代」（2号、一九四六年八月）に掲載されたものである。勿論「煙突男」は小説であり麻田と吉行を安易に一致させることはできないのだが、麻田の人物造形に吉行自身の体験が引用されているのは明らかで、吉行がナチスについての自分の認識の起源を「世代」での活動と考えていたことはおそらく間違いない。

しかしこの部分でより重要なのは『ワイマール共和国の悲劇』の著者が実は岡義武であって竹山道雄ではないという点である。[10] 竹山は「世代」の主要な執筆者の一人であり、ナチスに対して鋭い批判を展開した論者でもあった。[11] 当然、吉行はその文章を読んでいたに違いない。

吉行は誤って自己のナチスに対する認識の起源として竹山の名をあげた。それほど印象的だったということになるだろうが、ではその竹山はナチスをどのように語っていたのか。「世代」に掲載された竹山の「知識人の裏切り？」（「世代」8号、一九四七年十二月）[12]をみれば、吉行が竹山から受けた影響を確認することができる。

竹山は現代の政治が「人間の精神を変形すること」を企んでいるとし、その最も科学的なものとしてナチスを例にあげる。

竹山は「日本の軍人はまだ十分に近代人ではありませんでした。（略）それだからかれらは、支配のためにも近代の利器をそれほど有効に使役していませんでした。日本人はまだしも幸せでした。ナチスは完全な近代人でした。かれらは一切の文明の成果をあますところなく利用しました。それで、ナチスの指導者たちは、日本の軍

人たちよりもはるかに壮大な悪魔的事業を遂行したのです」と語り始める。「愚劣」な日本に対比されるナチスは、吉行の「「戦中少数派」の発言」でも見られたものである。

竹山が語るのはナチスの洗脳である。反ナチスの思想を持つ上級中学校の校長をナチスは「条件反射の原理」を応用して「思想矯正」したという。毎日、校長に繰り返しナチスの思想を大声で朗読させる一方、反ナチスの思想を朗読する時には椅子に電気を流し身体的な苦痛を与える。その身体的な苦痛はやがて校長の観念に影響を与え、校長は完全に親ナチスに洗脳されてしまう。

同様のナチス観はいいだもによって「ファシストは謂はば心情の力学者であり、常に精神の感性的部分に着目しそれを利用することを忘れない[13]」、「ナチスの理論はいかに粗野であつてもともかく理論を以て現実を規制しようとしてゐた[14]」と、「世代」に繰り返し書かれていた。おそらく「科学的」な「理論」に基づいて洗脳、統治するナチスという認識は「世代」同人の間で共有されていただろう。吉行も例外ではなく、竹山やいいだの文章にみられるナチス観が「「戦中少数派」の発言」でのナチスに対する吉行の認識の下敷きとなっているといって間違いない。

（2）「原色の街」と軍国主義批判

このような軍国主義に対する批判的言説にふれる中、吉行は「原色の街」で軍国主義を寓意的に描こうとしたのではないだろうか。軍国主義に対する認識を共有しているはずの「世代」同人はその主題を「理解」するだろう、吉行はそう期待していたのではないだろうか。

吉行は「原色の街」の主題について次のように述べている。

当時、私の頭にいつもひっかかっていたのは、精神と肉体との微妙な関係であった。環境が肉体にどう作用し、その作用がいかに精神に及ぶかを確かめてゆくような小説を書きたいとおもった[15]。

「人間とか、精神の在り方とか、いろんなものを書こうとしているんだけど、ぼくの場合はどうしても性がからんでくる[16]」と語られる「性」を描く理由、「原色の街」執筆時には娼婦に触れたことはなかったという回想[17]、冒頭で引用した風俗小説ではないという自負。吉行のこれらの発言が総合されて「原色の街」は風俗や性それ自体を描くものではなく「精神」を描くことに主題がある作品だと解釈されてきた。しかし吉行のナチスの洗脳に対する認識をふまえて「原色の街」を再読すれば別の読みも可能になるのではないだろうか。

吉行は「環境が肉体にどう作用し、その作用がいかに精神に及ぶか」を描こうとしたと語った。それは娼婦の街という「環境」での生活によって次第に娼婦の肉体となり、そのことが「精神」に作用し、次第に「精神」が変容してゆく娼婦あけみの物語のことだが、これは明らかに「最新の科学を剛に柔に応用して生理に変化を与え、精神を変形させようとした」というナチスの科学的洗脳の論理をふまえて発想されたものといえるだろう。

さらに「原色の街」を発表した直後に「世代」で行われた野間宏『真空地帯』[18]の合評会で、吉行は次のように述べている。

結局、軍隊を悲惨だと思わない人間ばかり書かれていて、軍隊そのものがあまり悲惨ではなくなつてしまつている。こういう材料を使つて書くのだつたら、ぼくは軍隊を悲惨だと思うような奴が、次第に軍隊機構のなかに入りこんでいつてその一部分となつていく過程をもつと突込んで書いてあればもつと面白いだろうと思うのだがね。[19]

「軍隊を悲惨だと思うような奴が、次第に軍隊機構のなかに入りこんでいつてその一部分となつていく過程」を描く軍隊の物語は、娼婦の街という機構の中に次第に入り込んでいく娼婦あけみの物語と同じ論理で構築されている。「原色の街」は「真空地帯」が発表される以前に執筆されているので直接の影響関係はあり得ないが、この発言から吉行の軍隊機構に対する認識と「原色の街」の物語が重なっていることが確認できる。

つまり吉行が「環境が肉体にどう作用し、その作用がいかに精神に及ぶか」を描くと述べた娼婦あけみの物語は、ナチスの科学的洗脳を受ける精神の物語、軍隊機構に巻き込まれる精神の物語として読むことができるのである。

「原色の街」に登場するもう一人の視点人物元木英夫も同じように軍国主義の在り方を描き出している。元木はナチスのごとく洗脳を行うのである。

元木の婚約者、瑠璃子は「感情のやりくりには無縁と思われる」「京人形にコケツトリーをつけたのような女」である。元木は「瑠璃子を珍しい玩具をとり扱うように操作していた」と語られるが、元木の欲望は他人を「操作」することにある。[20]つまりそれは瑠璃子を「洗脳」することである。元木が瑠璃子を「洗脳」していく過程は次のように語られる。

話題は瑠璃子が提供した。彼は、もつぱら聞き役にまわつた。この二人の許嫁者のあいだの話題は奇妙なもので、彼女は、自分の初恋の男のことを、詳細に、くりかえして語るのだ。

彼がどんなに純一な男だつたか。彼と彼女の恋がどんなに清純なものであつたか。彼が東大の法科を出た秀才で、海軍の予

備士官となり、戦艦大和に乗組んで、どんなに悲愴な最期を遂げたか。彼女がどれほどまで、彼に魂を奪われつづけているか。（略）瑠璃子は、予備海軍士官の教え込んだ、特殊で露骨な言葉を、執拗に叫んだ。（略）彼は親切に丁重に彼女の一語々々にうなずきかえし、やがて親切丁寧にその衣裳を脱がし、そして何気なく、気づかぬように、女の唇から洩れる歓語を、彼の趣味に合うように、修正してやる。

瑠璃子は「初恋の男」に「魂を奪われつづけて」いる。元木の洗脳の物語は、瑠璃子の性交の場面で初恋の男が教え込んだ言葉を「修正」するという形で物語化される。

ところでナチスの洗脳をふまえて構想された元木とあけみの物語は、なぜ性的な場面を舞台として物語化されたのだろうか。なぜ吉行は「精神と肉体との微妙な関係」を主題とする「原色の街」に、「娼婦の町という環境が便利」だと考えたのだろうか。

この点もまた吉行独自の発想というわけではなかったようだ。「煙突男」では先に引用した部分の後に「そのころ、もう一つの関心が、麻田に起ってきた。ナチスがセクシーに感じられはじめた」と続く。ここでいう「そのころ」とは一九七〇年代になってからのことだが、続いて「ヒトラー」というドキュメント映画に登場するヒトラーの演説の様子は次のように描写されている。

しだいに身振りを混え、声のヴォリュームを上げてゆく。ついには、その声と身振りに自分自身が巻きこまれ、恍惚と陶酔が顔と全身にゆきわたり、オルガスムスに襲われる直前のようになってしまう。聴衆もそれに同調し、とくに女性ははっきりオルガスムスにつつみこまれて、喜悦の涙が流れる顔面は異様にかがやいている。[21]

演説中のヒトラーが聴衆と「性的」に「同調」し、会場が「オルガスムス」につつみこまれていく、とする吉行の分析の妥当性はさておき、問題は「原色の街」を構想した時の吉行がそのような発想を持ち得たのか、ということである。

果たして吉行が「原色の街」を執筆する以前の「世代」の中で、すでにナチスにおけるヒトラーと民衆の結びつきが性的なものとして語られていた。いいだももがフランスの小説家ジャン・ゲノーの「ヒトラーには性的魅力がある」[22]という言葉を引用していたのである。

吉行がジャン・ゲノーの言葉から「原色の街」を発想したとまでは言えないかもしれないが、「世代」に引用されたジャン・ゲノーの言葉を吉行は間違いなく読んでいたはずである。そして元木が瑠璃子やあけみの性的な快感を操作することで精神を操作しようとする「原色の街」の物語は、ジャン・ゲノーの言葉と重なり合う。

吉行が「世代」にみられる軍国主義批判、ナチス批判の論理をふまえて「原色の街」を論理的に構成していったことはおそらく間違いない。しかし男に身体を管理され、次第に洗脳されていく女の姿、つまり軍国主義に洗脳されていく人々の精神の様子だけが比喩的に描かれただけではなかった。むしろそのような他人の内面を操作しようとする試みすべてが不可避に破綻するということを吉行は描こうとした。それは同時に「世代」同人と吉行の政治的な立場の差異の表明にもなっていた。

（3） 軍国主義、革命の不可能性

元木は瑠璃子を自分の色に染めること、洗脳の完成一歩手前までたどり着く。

最近では、瑠璃子は全身で彼が気に入っている様子であつた。この数日、彼女が初恋の男のことを話さないのに、彼は気付いていた。それは、ふたたび白い色に戻つた彼女の全体が、相手の男の好む色に染められるのを待つている姿と見えた。

元木の行為が洗脳であるとすれば、「初恋の男」が瑠璃子にしたことも同じく洗脳である。ここで瑠璃子の「初恋の男」が「戦艦大和」で「悲愴な最期を遂げた」予備海軍士官だったと、わざわざ語られていることの意味を考えなければならない。日本軍国主義の象徴ともいえるようなこの男が瑠璃子の肉体に教えこんだ言葉を自分の言葉に「修正」していく元木の行為は、日本軍国主義の言葉を「修正」していくこと、戦時中の軍国主義を違う色―民主主義や共産主義など―に塗り替えようとする、敗戦後数多くみられた行為を寓意していると解釈することができるのである。

そこには「世代」同人たちが熱心に語りあっていた「来たるべき革命[23]」も含まれていただろう。瑠璃子は軍国主義に染まりきった戦前の人々であり、元木はそれを啓蒙する知識人―そこに「世代」同人たちも含まれる―ということになるだろうか。

このように瑠璃子の初恋の男が「戦艦大和」の乗組員と設定されることによって、元木の洗脳は単に戦時下の日本軍国主義による洗脳だけではなく、実はそれが新たな洗脳に過ぎないという批判も含めて、戦後の啓蒙や「革命」までをも含意していると読めるのである。

瑠璃子を自分の色に染める一歩手前までたどり着いた元木だが、洗脳の物語はそこで頓挫する。それは元木が予想してもいなかったあけみの行動による事件がきっかけとなっている。

「原色の街」は元木に操作される二人の女、瑠璃子とあけみを対比的に描くことによって構成されている。二人の対比を確認し、物語全体を整理することにしよう。

瑠璃子や多くの娼婦たちは「感情の動き自体から、まつたく無縁」である。「人形」のような瑠璃子は元木の操作をうけて「相手の男の好む色に染められるのを待つている姿」となる。

対して視点人物であるあけみは動く「心」を持っている。そのため、あけみは瑠璃子とは対照的な反応をみせる。日々の仕事から「快感」を感じないことを自分が娼婦になりきっていない証と考えていたあけみは、一方で娼婦の生活によって躯を成熟させていく。心と躯がアンバランスな状態にあったあけみは、躯だけを刺激して帰るという元木の「心理のうえのアクロバティーク」をきっかけとして、仕事から快感を感じる「成熟した女」の躯になってしまう。動く「心」を持つあけみは、娼婦の街という環境に影響されて変化してしまった自分に動揺する。あけみは自分の快感が元木に対する「恋慕の情」に由来するのではないか、と考えることでその不安をかき消そうとする。先に述べたとおりこのあけみの動揺を描くことが「環境が肉体にどう作用し、その作用がいかに精神に及ぶかを確かめてゆく」ことである。

あけみは元木への「恋慕の情」を募らせていく。そして船上レセプションで瑠璃子とあけみがすれ違うことによって事件が起こる。元木が瑠璃子をみる「物質を眺める眼」を自分に向けられたと「取り違え」たあけみは「心」のバランスを失い、発作的に元木に体当たりし二人は海に落ちていく。海から引き上げられた二人を見て水夫は「まるで、兄弟みてえじやねえか」と声を上げる。語り手はこの「兄弟」という言葉が「都会の二人の大学生」が外見だけでなく「ずっと広い範囲内での二人の相似を示している」ようなものだと解説している。

ここで元木とあけみの相似が「都会の大学生」の相似に比喩されていることはきわめて意味深い。なぜなら「都会の大学生」とは吉行を含めた「世代」同人たちに他ならないからである。[24] つまりこの比喩によって、動く「心」を持っている元木とあけみと「世代」同人の、外見より「ずっと広い範囲内」での相似が語られることになるのである。

元木、あけみ、「世代」同人、そして吉行が同類であるとすれば、「原色の街」は吉行の次のような思想表明とも読める。元木の洗脳―革命は、洗脳される側にいる「心」を持った人物の「不意」の動きによって破綻する。それは戦時下でも軍国主義の色に染まることなかった「戦中少数派」と後に自称する吉行や、おそらく吉行と同じような考えを持っていた「世代」同人たちが「革命」を語ることの不可能性を描き出そうとしていたのではないだろうか。「革命」を不可能にしているのは一元的なものに従うことのできない自分たちのような「心」を持つ人間なのだ、と。「原色の街」は当初「世

代」に掲載される予定ではなかったという[25]から、「大学生」は「世代」同人のみを指示するものではない。それは「革命」や民主主義の啓蒙を語る言説一般に対する吉行の批判だったのだろう。

本稿の考察を簡単にまとめて結論にかえることにする。

吉行が語るように「原色の街」の主題が「環境が肉体にどう作用し、その作用がいかに精神に及ぶかを確かめてゆく」ことにあったとすれば、具体的には反発しながらも軍国主義という環境に取り込まれてしまう精神を描くということであった。そのような主題が小説として構築される過程で、軍国主義や軍隊機構は娼婦の街という「環境」に置き換えられたのだ。

ここで「性」という題材が先にあったのではおそらくない、という点を強調しておきたい。戦争体験によって「世代」同人に共有されていた反軍国主義の姿勢の中で、抑圧される精神、という主題を得た吉行は、それを小説にする過程で竹山道雄や「世代」の言説の影響を受けながら、作品の舞台として娼婦の街、そして「性」というその後の作家生活で中心的存在となる題材に出会った[26]。これが「性」と「戦時下の体験」が結びつくに至る経緯だったのではないだろうか。

日高普は「原色の街」が「合評会では社会性がないとの理由から好評でなかつた」と述べている[27]。しかし本稿の考察からは吉行が「原色の街」で、軍国主義による洗脳という「社会性」をもった主題を描こうとしていたとみることができる。「世代」同人を含めて読者は「原色の街」から「社会性」を積極的に読みとろうとはせず、またその後の作家活動全般にわたって吉行はいわゆる政治的な作家とはほど遠いと見なされていた。それは何より吉行自身が少なくとも「原色の街」からは読みとれる「社会性」を主張しなかったことに由来しているのだが、このような吉行の身振りの意味を解釈する上で本稿が試みた「原色の街」の「理解」は参考になるだろう。

ただしこれは「原色の街」以後の作品で吉行が、「性」を描くことに「原色の街」と同様の「社会性」を付与していたことを意味しない。吉行が作家として出発した時点から既に「性」に独自の主題、確固とした意味を見出していたと思いこむ必要などないのだ。「原色の街」をはじめとする娼婦を描いた小説は吉行の代表作となっているのでしばしば忘れられてしまうことだが、これらは吉行の作家出発期に書かれた作品群なのである。題材、方法の様々な可能性を模索していたこの時期の吉行にとって、「原色の街」における「性」と軍国主義や洗脳との結びつきはその模索の一つの結果だった。「原色の街」を通過点として吉行はさらに別のかたちを模索していく。

注

① 吉行淳之介『私の文学放浪』（一九六五年五月三十一日、講談社）

② 山田有策「吉行淳之介の道具立て―肉体・生理の自覚的方法化」（「解釈と鑑賞」40―11、一九七五年十月）

③ 吉行淳之介『生と性』（一九七四年十二月三十日、大和書房）

④ 前掲書『私の文学放浪』。

⑤ 浜田新一「『世代』のころの吉行のこと」（新鋭文学叢書『吉行淳之介集』月報、一九六〇年九月十五日、筑摩書房）。なお浜田新一は日高普の筆名。

⑥ いいだもも「消えた鼠は生きている」（「思想の科学」13号、一九六〇年一月）

⑦ いいだもも「『世代』初期の思い出」（『世代』復刻版、別冊解説（一九八〇年十一月二十五日、日本近代文学館）

⑧ 吉行淳之介「戦中少数派の発言」（初出「東京新聞」夕刊、一九五六年四月十日、十一日）、引用は初刊『軽薄派の発想』（一九六六年二月二十五日、芳賀書店）より。

⑨ 吉行淳之介「煙突男」（「オール読物」34―2、一九七九年二月）

⑩ この誤記は初刊『菓子祭』（一九七九年十月五日、潮出版社）、再刊『菓子祭』（一九八一年四月二十五日、角川文庫）の後、『吉行淳之介全集　第十二巻』（一九八四年四月十日、講談社）に収録される際、ようやく修正される。ちなみに一九八〇年十一月、「世代」が日本近代文学館から復刻、出版されている。

⑪ 竹山は本文で参照した「知識人の裏切り？」と同様のナチス批判を「新潮」などに発表していた。竹山は後見人的立場として「世代」に深く関わっており、あるいは同人の多くにとっては一高での教師であり、「世代」同人に大きな影響を与えていたと考えられる。また竹山は戦中から一高の授業においてナチス批判を行っていたという。「当時流行のナチスなど、先生によれば、金髪碧眼などという事を自慢にし、ニーチェの比喩を浅薄に文字通り実現しようと、超人気取りで市民社会を破壊する狂信者にすぎなかった。」（松下康夫「四十年来の師」『竹山道雄著作集』第三巻　月報、一九八三年六月十五日、福武書店）

⑫ 吉行が「煙突男」の中で「昭和二十二年」にナチスについての文章を読んだという記述は、竹山の「知識人の裏切り？」の掲載時期と一致する。しかし、改稿は論文名ではなく竹山の名に施された。改稿からは吉行が岡、竹山のどちらの文章を意図していたか判断することはできない。しかしいずれにせよ、吉行は竹山の文章も同様に読んでいたことは間違いないし、竹山の名によってナチスの知識を表象した事実は残る。あるいは吉行が他の媒体からナチスの情報を得ていた可能性も否定できないが、ただ粕谷一希は竹山がナチスの電気ショックによる洗脳を書いたことについて「これは後年広く論じられ出したことで、昭和二十二年当時、それを推理した著者の洞察力は鋭い」と竹山の先見性を述べている。（粕谷一希「解説」『竹山道雄著作集』第三巻（注⑪参照）

⑬ 宮本治「第二の東條」（「世代」7号、一九四七年九月）、宮本はいいだもものの筆名。

⑭ 木下三郎「人間的條件」（「世代」9号、一九四七年十二月）、木下はいいだもものの筆名。

⑮ 吉行淳之介「私のなかの娼婦」初出不明。引用は初出『軽薄派の発想』（注⑧参照）より。）

⑯ 前掲書『生と性』。

⑰ 前掲書『私の文学放浪』など。

⑱ 野間宏『真空地帯』（一九五二年二月二十九日、河出書房）

⑲ 「合評　野間宏　真空地帯」（「世代」17号、一九五二年七月）

⑳ 他人の心理を操作しようとする元木の人物設定は、前作「薔薇販売人」の登場人物伊留間恭吾を継承している。つまりナチスの洗脳の主題は「薔薇販売人」にも見いだせる。二作品の関係については別稿で論じる。

㉑ 前掲「煙突男」。

㉒ 前掲宮本「第二の東條」。

㉓ 前掲浜田『『世代』のころの吉行のこと」。

㉔ 「世代」はそもそも「学生あるひは学生に準ずる者」によって編集される雑誌として出発した（「世代」1号、一九四六年七月）。この時期吉行を含めて幾人かの同人はすでに学生ではなくなっていたが、無論、本稿が指摘しているのはそのような具体的な事実ではない。

㉕ 前掲書『私の文学放浪』。

㉖ このように考えたほうが「性」を描いたとは言い難い同時期の作品、例えば「祭礼の日」（「文学界」7―4、一九五三年二月）などと「原色の街」に至るまでの習作期の方法的模索について、詩から散文への移行という側面から説明している（前掲書『私の文学放浪』）。詩から散文への移行、娼婦小説の作品間の差異を含めた同時期の作品の関係については別稿で論じる。

㉗ 浜田新一「ある同人雑誌のこと」（「新潮」49―11、一九五二年十一月）

［附記］

「原色の街」の引用は初出「世代」14号より行い、その他の引用については注に記した。引用に際して一部旧漢字を新漢字に改めた。